

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 5 日現在

機関番号：32661

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16687

研究課題名(和文)戦後日本社会における 青空 表象の分析：プランゲ文庫所蔵資料を中心に

研究課題名(英文) Cultural Interpretation on the Representation of Blue Sky during the Post-war Period in Japan

研究代表者

鈴木 貴宇 (SUZUKI, Takane)

東邦大学・理学部・准教授

研究者番号：70454121

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は戦後日本の大衆文化における 青空 表象に注目することで、それが占領期の民主化政策過程から胚胎された心情であることを明らかとした。その成果は次の通り：早稲田大学20世紀メディア研究所主催企画展示およびシンポジウム「雑誌に見る占領期」開催 労働組合文化運動における機関誌の分析 ホワイトカラー層の労組文化運動において 青空 が特徴的な表象として機能することの指摘。 については、戦後の出版文化を占領期から通時的に分析する視座を得ること、また広くその成果を社会に示すことができた。 については、戦後民主主義と 青空 表象の相関性を、労組運動に絞ることにより焦点化が可能となった。

研究成果の概要(英文)： This research initializes the importance of the representation of blue sky in the popular culture during the post-war period in Japan. This study aims to point out the origin of this phenomena can be found in the process of democratization in the occupation period. It implies that the representation of blue sky closely associated with the idea of post-war democracy (senjo minshu-shugi). As the result of the research, three issues summarize what the research dealt with: 1, Organize the exhibition based on the materials published during the occupation. It provided how the bringing archives or ephemera occupied Japan to life could be possible. 2, The interpretation on the bulletin published by the labor union during the occupation to the 1950s. 3, Focusing on the poetry works written by the bankers and clarified that the representation on the blue sky was the distinguishing characteristics found in white collars writings.

研究分野：日本近代文学

キーワード：戦後日本社会論 戦後文化 占領期研究 プランゲ文庫 労働組合文化論

1. 研究開始当初の背景

(1) 戦後大衆文化における〈青空〉表象への関心
第二次世界大戦からの復興を象徴する表象として〈青空〉が戦後の大衆文化において特権的な位置にあるのではないかという仮説からスタートした。具体例としては、戦後初の流行歌とされる並木路子『リンゴの唄』(1945) 歌詞に現れる「青空」や、カラー映画で作成された『カルメン故郷に帰る』(1951) でヒロインらが青空の下で展開するダンスシーンなどが挙げられる。こうした〈青空〉表象を流通させるに至った社会的心性を明らかにしたいと考えた。

(2) プランゲ文庫が所蔵する報道写真を用いた占領期研究の体系化への試み

これまでに採択された科研(「戦前期日本を中心とする〈サラリーマン〉の表象研究:日本モダニズム論再考」研究課題番号20720064)との接続として、占領期の一次資料を所蔵するメリーランド大学図書館プランゲ文庫(Gordon W. Prange Collection, UMD)の報道写真群継続調査も兼務できる研究課題を模索していた。本研究では、戦前と戦後における〈サラリーマン〉表象の変容と、それをもたらした社会構造の変化を考察するにあたり、占領期を一つの重要なモメントとする視座をプランゲ文庫の資料より得たが、今回の課題はその視座をさらに補強する目的と、戦後日本大衆文化論との接点を企図したものとなっている。

2. 研究の目的

(1) 詩的言語が社会に流通する様態

〈青空〉表象が戦後日本社会を考察する上で重要と思われる点は、それが歌謡曲や映画といった大衆文化のみならず、同時期の詩においても頻出することだ。抽象度の高い詩的言語と、一過性の流行現象と見なされがちな大衆文化双方にて顕現化する〈青空〉表象に着目し、その背後にある社会的心性を明らかにすることで、複眼的な戦後日本社会論の構築が可能となると考えた。

(2) 占領期の写真やポスター(エフェメラ)を利用した戦後文化史研究の体系化

(1)にて述べた点を遂行するにあたり、主要な資料群としたものが占領期に撮影された写真、大衆雑誌、組合機関誌、ポスターといったエフェメラ(英:ephemera 文書といった公的な性格を強く持つ、長期保存が前提となった資料とは異なり、一過性の特徴を持つ印刷刊行物)である。本研究は、広義において「大衆文化」の様態を占領期に特化して行うものであるが、そのためには ①占領期の刊行物であり ②当時の生活文化を記録した資料が必要となる。占領期の検閲文書を所蔵することで知られるプランゲ文庫には、組合機関誌やポスター、また報道写真と

いったエフェメラも多く保管されていることから、本研究はこうした資料がどのように文化史や歴史研究において有効利用されるかの提示を試みることにした。

3. 研究の方法

(1) プランゲ文庫調査(海外)

本研究遂行にあたり、最も重要でありかつ資金が必要となるものがメリーランド大学プランゲ文庫調査である。上述したエフェメラの資料は、データ化の対象外(報道写真など)が、あるいはデータとなってもメリーランド大学内においてのみ閲覧可能となっているものも少なくない(ポスター資料等)ため、現地調査が不可欠となる。プランゲ文庫で調査が必要となる資料は次の通り:

- A) 報道写真(時事、共同、サン) 悉皆調査
- B) 労働組合機関誌(国内に所蔵のないもの)
- C) タイトルに「青空」を持つ雑誌記事

(2) 早稲田大学 20 世紀メディア研究所での研究発表およびエル・ライブラリー(大阪産業労働資料館)での調査(国内)

占領期研究はここ10年で飛躍的に進展を見たが、その功績は早稲田大学 20 世紀メディア研究所による継続的な占領期雑誌新聞資料のデータ調査にあった。本研究代表者は、前回の科研費採択を契機として、同研究所の特別研究員を経て、2016 年度より編集委員を務めている。研究過程の調査報告や、専門的知識の教示を得るために、同研究所での定例研究会での報告と、同研究所の年刊機関誌『Intelligence』への投稿を行うことで、広く研究成果を問うことにした。また、国内でも大阪のエル・ライブラリーは現代労働問題に関心を持つ研究者、一般市民に開かれた専門図書館であり、同ライブラリーが所蔵する資料も、プランゲ文庫同様のエフェメラルな特徴を持つ。本研究に着手して2年目より、「労働組合」における〈青空〉表象に絞ることで問題が明確になるとの考えから、同ライブラリーの労働組合機関誌調査も行うことにした。

4. 研究成果

(1) 20 世紀メディア研究所主催「雑誌に見る占領期」記念国際シンポジウムと企画展示の実施

本研究の成果として最も広く社会的に公開できたものが、2016 年 9 月に行った 20 世紀メディア研究所 100 回記念企画展示および記念国際シンポジウム「雑誌に見る占領期」の開催である。研究代表者は、同企画において ① 展示パネル「科学・労働」部門担当 ② 記念シンポジウムのゲストスピーカー、ルイズ・ヤング教授(ウィスコンシン大学マディソン校) 通訳として参加。戦後日米関係の

変容という巨視的な観点に基づく出版メディアの調査が今後の研究に必要なことが明らかとなった。本研究との関連では、「労働・科学」のジャンルに分類された占領期の雑誌においても、〈青空〉イメージが、ラジオの公共電波により普及する民主主義との関連で表象される例などがあることが明らかとなった。



図1 「電波科学」(1948年8月)表紙 早稲田大学福島コレクション(右) 展示ポスター(左)

(2)「カストリ雑誌」研究への接続と継続調査

(1)で述べた記念シンポジウムに石川巧教授(立教大学)に登壇依頼をしたことがきっかけとなり、占領期の雑誌を「ローカルメディア」という観点から、地方で刊行された雑誌調査を行う研究グループに参加することになった。結果、本研究が終了した後も、「占領期ローカルメディアに関する資料調査および総合的考察」(研究代表者:大原祐治 研究課題番号16H03386)の研究分担者として、占領期研究の継続が図られることになった。本研究では写真をはじめとする視覚資料、また労組の機関誌を中心に、〈青空〉という表象に特化して調査を行ったが、それが地方雑誌の場合はどのような特徴を持つことになるのか、続けて研究を行う予定である。

(3)エル・ライブラリー(大阪産業労働資料館)での調査による労組機関誌研究

論文業績①および④を契機として、〈青空〉表象が戦後民主主義の象徴である様態をもっとも明瞭に反映するものは、敗戦後間もない時期に隆盛を見る労組運動においてであることがわかり、研究2年目より労組の資料に限定して国内調査を展開した。その成果は最終的には(4)の『ひろば』復刻へと至るが、その過程で国内の労働資料を多く持ち、またスタッフからの専門的知見の提供を受けることのできるエル・ライブラリーでも調査を行うことができた。同ライブラリーで調査した資料のうち、大阪中央電報局労組の文芸誌『青空』(1955)は、敗戦から高度成長まで〈青空〉表象が機能していたことを伝えるものである。組合員たちによる詩の言葉と、〈青空〉に希望を投影する心性が日本社会に広く共有されていた時期がいつまでなのか、

今後はその点を明らかにすることで、戦後日本社会の変貌を表象から描くことも可能となるだろう。



図2 大阪中央電報局機関誌『青空』(1955)

(4)全銀連機関誌『ひろば』復刻および解説執筆

戦後民主主義思想への希望と、戦争終結に伴う解放、そして自己表現への渴望が凝縮して展開された場が、戦後労働組合の文化運動と考えられる。日本の労働運動は、経済闘争のみならず、自己の変革といった抽象的な価値を以て展開された点に特性があるが、そうした葛藤や心情が文学的表現となって記録されることになった。すでに、現場労働者のサークル運動研究は道場親信をはじめとする蓄積(『下丸子文化集団とその時代』)が成されており、本研究はそうした先行研究を踏まえ、ホワイトカラー層の労働運動に着眼した。戦後日本の高度成長期に社会層としての厚みを増すホワイトカラーたちの心情分析を行うためである。その成果として、銀行労働組合の横断組織であった全銀連(全国銀行従業員組合連合会)機関誌『ひろば』(1951-2001)の復刻監修に携わることとなった。本研究の継続課題として、重要な位置を占める「戦後民主主義思想の発展と展開」を労働運動および組織社会の中で考察する作業の布石となった。



図3 『ひろば』復刻パンフレット

(5)『銀行員の詩集』調査による〈青空〉表象の分析

(4)と関連して、本研究は一つには詩的言語における〈青空〉表象の考察も目的としていたが、その成果が全銀連文化運動を象徴する詩集『銀行員の詩集』(1951-60、全10

冊)分析である。これは論文(図書②)としてまとめることができた。『銀行員の詩集』は、上述した機関誌『ひろば』に掲載された銀行員による投稿詩を集めたものである。戦後詩を代表する一人、石垣りん(日本興業銀行)がここから登場していることから、詩史的な価値も有するものだが、本研究が着目したことは「勤労詩」の文脈で、1950年代の現場労働者による詩作品との比較検討にあった。その結果、〈青空〉に対して重層的な心情(敗戦に伴う虚脱意識、民主化への希望、戦死した知己をめぐる喪失意識)を託す作品は、圧倒的に『銀行員の詩集』に多いことがわかった。それはまた、ホワイトカラー層と現場労働者層の間には、職務的な階層性だけではない断絶があったことを示唆しよう。

(6) プランゲ文庫所蔵資料の途中経過および展望



図4 プランゲ文庫所蔵資料
「第一騎兵師団パレード」
(サンニュース配信: 1948年12月22日 S1537)

本研究遂行過程において、最も収穫を成すことができたものは、労組の機関誌調査にまつわるものであった。その結果、プランゲ文庫が所蔵する報道写真の整理と分析は、今後の課題として残されている。たとえばここに挙げた写真のように、星条旗が翻り、米兵たちが闊歩する風景の中で上述した〈青空〉への視線は寄せられていた。こうした写真から何を読みとることができるか、そしてそれを研究者以外の人々に向けて、戦後の歴史を考える際の資料としてどのように提供することができるか、これは本研究が今後考えるべき、大きな課題と言える。現時点では、こうした写真資料を用いた上で、本研究の成果を視覚的に公開することのできる企画展示の開催を考えているが、その現実化に向けて引き続き継続調査が必要であることは言うまでもない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ①. 鈴木貴宇「銀行労働運動における機関誌の意義と考察: 機関誌『ひろば』を中心

に」(『Intelligence』第18号)、査読有、2018年、76-88

- ②. ルイーズ・ヤング、鈴木貴宇訳「新世紀における占領期研究再考」(『Intelligence』第17号)、査読有、2017年、4-12
- ③. 鈴木貴宇「浮遊の表象: 近藤東と『カタカナ』詩の問題を中心に」(『昭和文学研究』第74号)、査読無、2017年、1-14
- ④. 鈴木貴宇「パトスとしての文壇: 巴里会と組合文化運動を事例として」(『文学』第17巻第3号)、査読無、2016年、104-126
- ⑤. 鈴木貴宇「『あのひと』のいる街: 岩田宏『神田神保町』をめぐる小論」(『るる』、第2号)、査読無、2015年、42-53

[学会発表] (計4件)

- ①. 鈴木貴宇「源氏鶏太の描いたサラリーマン」、富山県高志の国文学館主催、招待講演、2017年10月21日
- ②. 鈴木貴宇「占領期における欲望のかたち: 雑誌『新商品と新発売』を事例として」、早稲田大学20世紀メディア研究所、2016年12月23日
- ③. ルイーズ・ヤング、鈴木貴宇通訳「新世紀における占領期研究再考」、早稲田大学20世紀メディア研究所主催「雑誌にみる占領期: 福島鏗郎コレクションをひらく 記念国際シンポジウム」、2016年9月18日
- ④. 鈴木貴宇「青空のゆくえ: あるいは戦後日本におけるアメリカ表象の分析」、日本比較文学会東北支部 第14回比較文学研究会、2016年7月31日

[図書] (計3件)

- ①. 和田博文監修、鈴木貴宇編集『コレクション・戦後詩誌 8 社会主義リアリズムの系譜』、ゆまに書房、2017年、総1143ページ。
- ②. 鈴木貴宇「詩を読む銀行員たち: 『銀行員の詩集』試論」、坪井秀人編『戦後日本をよみかえる』所収、臨川書店、2018年12月刊行予定、総250ページ。
- ③. 鈴木貴宇解説『ひろば 復刻版』、不二出版、2018年6月刊行予定、総910ページ。

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等

<https://researchmap.jp/1930bauhaus/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木貴宇 (SUZUKI, Takane)

東邦大学・理学部教養科・准教授

研究者番号：70454121

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし